〝周回遅れのトップランナー〟

コケの時代がついに来た!?

身近にあってかわいらしい反面、環境汚染の指標にもなる、小さなからだに無限の可能性を秘めている。コケの専門家、福井県立大学の大石善隆講師にその魅力と今後の可能性を聞いた。

福井県立大学講師
大石善隆

●おおいし・よしたか　静岡県生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。信州大学農学部助教、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター研究員を経て、この4月から福井県立大学学術教養センター講師に着任。著書に『苔三昧―モコモコ・うるうる・寺めぐり』（岩波書店）がある。

清楚でみずみずしいコケの魅力

――福井県立大学（以下、県大）で新しく開講した授業「コケの世界」は三百人もの学生が受講しているそうですね。

最初は三十人程度の小規模な授業を想定して、小さな教室を押さえていたのですが、一回目の授業で教室に入りきれない学生が廊下にズラッと並んでいた。「みんな、これはコケの講義だけれど間違えていないか？　コケの授業だと知っているのか？」と聞いたら、「はい」と言うんです。本当に驚きました。授業の最後に「コケは好きか？」と聞くと「おー！」と答えてくれました。周回遅れのトップランナー、コケの時代がついに来た！　のかもしれません（笑）。

県大のある永平寺町の隣、勝山市は日本の恐竜化石発掘の大半を占めていることから「恐竜学」の授業も開講していますが、こちらは男子学生が多く、コケは女子学生が多い。身近にあって、イメージも柔らかく、おちゃめでかわいらしい、ほっこりする存在というのも女子学生を中心に受講者が増えた理由でしょうか。

――コケに関する授業を開講するのは初めてですか？

信州大学の植物学の授業でコケを扱った程度です。それ以外では、何度か市民向けの講演会で話したことはありますが、コケそのものをメインテーマに掲げた授業は今回が初めてです。県大には「得意な分野を生かして環境学に関する授業をしてほしい」と呼んでもらったので、「コケの世界」を提案しました。大人数の授業では資料を用意して一方的に講義するのがやりやすいのですが、それだけでは学生はつまらない。コケリウムというコケのインテリアを作ったり、その鑑賞会を開いたり、学生と対話をしながら進めています。

コケリウムは一ヵ月に数回、霧吹きで水をあげて、暗すぎず、暑すぎないところに置けば長く楽しめます。私は個々の生態を知っており、それに合わせてコケリウムを管理しているので元気に育っていますが、学生の何人かは一週間でダメにしてしまう。でも、こうした経験を無駄にせず、そこから生物と環境の関わりや命の尊さを考える授業にしていきたいですね。全員がコケを専門にするわけではありませんから、身の周りにあるコケを学ぶことで、生き物や環境をみる新たな視点を提供できたら素敵だなと思います。

――大石先生は、なぜコケの専門家になろうと思ったのですか？

子供のころから山奥の水辺で遊んでいて、小さくてキラキラしたものが好きでした。そう言うと、ちょっとアブナイ感じに受け取られるかもしれませんが、とにかく清楚でみずみずしいコケを見たときに、なんだか心惹かれるものがあった。もちろん将来仕事にしたいと思ったわけではありませんが、自分の感性にぐっと来るものがあったんです。ですがあくまで興味の範囲。なかなか次の一歩は踏み出せずにいました。

大学時代を過ごした京都では、庭園素材としてコケが非常に重要な役割を占めており、その価値も理解されていることを知りました。日本には優れたコケの分類学者が多く、分類に関する研究は非常に進んでいたのですが、それと比べてコケの生態や保全に関する研究はあまり行なわれていなかった。コケは環境に敏感な生物なので、コケを研究することで環境問題を理解する一つの手助けになるかもしれない、社会的にもコケ研究が重要になる可能性があるのではと考えるようになりました。

ところが大学四回生になって、いざ研究してみようと思ったとき、京大にはコケを専門にしている先生が